無音の執事～タイムキーパー～

王星　遥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
無音の執事～タイムキーパー～

【Ｎコード】
Ｎ３５０６Ｙ

【作者名】
王星　遥

【あらすじ】
人間が生活するこの世界に、吸血鬼が潜んでいたら・・・？　ギルバート王国の富豪の館で執事として働く「八草類」が、主人「アニマ・シェイドル」を守るため戦う！　悪魔でも妖怪でも何でも来いっ！　バトル系ファンタジー物語。

表紙イラスト

＞ｉ３４７８３―４２６４＜

表紙です。
吸血鬼状態の類を描いています。
絵師は、友人です。（使用許可は頂いています）
元々は、ｐｉｘｉｖで書いている時のものですが、ｐｉｘｉｖが使いづらくやめました。
表紙は気に入ってるので、これからも使っていきたいです。

ｐｉｘｉｖで書いていた頃とは、今書いている「無音の執事」は全く別物といっていい程話が変わっています。
「無音の執事」は、これからも続きます。もしかすると一年以上続けていくかも知れません。
これから、よろしくお願いします。

キャライラスト「八草類」

＞i34781―4264＜

男　18歳　執事

元人間の吸血鬼。能力は、「時を操る能力」

武器はナイフだが、剣術と馬術を習得している。

アニマに仕えた理由は、アニマと神菜子以外に知るものは居ない。

普段はモノクルを装着。右目の視力が極端に悪い。

吸血鬼となると、髪が白くなり目が赤くなる。五感が鋭くなるため

モノクルも不要となる。

酒癖が悪く、本人も酒を苦手とする。

余談だが、センスが悪い。美術系の作業には向かず、またプレゼン

トなどで相手を困らせる。

ただし、決められたものの模写や、楽譜通りの演奏は一流。

キャライラスト「零草神菜子」

＞i34999—4264＜
女　18歳　メイド長
正真正銘人間だが、アニマと類の招待を知る数少ない人間。
武器は派手なものを好み、ちまちまとした戦いを嫌う。
類と同じく、アニマに仕える以前の詳細が知られていない。
アニマに仕えたのは類より後で、実績も類のほうが上。

類に好意を寄せており、何かというと類を頼る。
アニマから気に入られてるためか、主従関係にある二人がともに紅茶を飲む光景が見られることもある。
悪魔との戦いで、「冷気を操る能力」を手に入れる。後に、この能力は神菜子の重要な武器となるであろう。

キャライラスト「アニマ・シェイドル」

＞i35314―4264＜

女　推定800歳　富豪

吸血鬼。七日に一回人間の血を飲まないと（吸わないと）灰になる特異体質。

人間の血を吸うことで、不老不死に近い能力を手に入れている。そのため、外見は8歳ほどの幼女のよう。

無邪気な性格や、立ち振る舞いも子供そのものだが、いざ真剣になると残酷な面も見せる。

影を操る能力【シャドー・コンダクター】は、自身の影とそれに触れる影を操ることが出来る。自身の影に触れていれば、影を縛り本体である人間の動きを止めることも可能（ただし、影に見えない瞬きなどは抑えられない）。

ティータイムを第一と考え、お菓子を食べそこねると禁断症状に近いものが起きる。

使用人を家族と考える彼女は、使用人とお茶の席を共にすることも多々ある。

趣味はヴァイオリンの演奏だが、指揮能力が高いためか指揮者を務めることが多い。

月に一度吸血館で開かれるコンサートは使用人総出で行われ、町の住民が聞きに来る。

少女、執事と出会う

ここは、ギルバート王国の南の地域に位置する街【ガラコタ】である。
そこに、逃げる強盗が一人居た。
「はぁ・・・駄目だ、逃げれる気がしねぇ・・・どうにか・・・ん？」
強盗の前に、腰を抜かした少女が一人倒れ込んでいた。
「丁度良い。人質になってもらう」
「ひぃ・・・た、助けて・・・」
「おい！　そこの男、止まれ！」
「来るんじゃねぇ！　来たらコイツを殺す！」
「や・・・助けて！　イヤァアアア！」
「騒ぐんじゃねぇ！」
人質を抱え、走る強盗。
強盗の前を、横切ろうとする幼女と日傘を持つ若い執事。
「退け！　退かないととお前らも撃つぞ！」
野次馬がざわめくが、二人とも退こうとしない。
「お嬢様、日傘をお持ち下さい」
「三秒で終わらせなさい」
「了解しました」
ほんの一瞬の出来事だった。三本のナイフが曲芸のように宙を舞った。
「痛ぇ！！　う、腕がぁ！」
一本は銃口に突き刺さった。
二本が、強盗の腕に直撃し、強盗が苦痛を顔に浮かべる。
それと同時に、執事が人質を抱きかかえて幼女の下へ戻っていく。
「大丈夫ですか？」
「は・・・はい・・・」

「三秒・・・ですよね？」
「・・・二秒九六ね」
野次馬も警察も、呆気に取られていた。ほんの一瞬で、強盗が無防備になったのだから当然だ。
「さて、行くわよ。類」
「はい。お嬢様」
執事は再び日傘を持ち、二人は去っていった。
「大丈夫か？　君」
警察に話し掛けられているのにも関わらず、少女はずっと執事を見ていた。
「あの人・・・誰だろう」
二人は、警察が参考人として追いかけたが、いつの間にか消えていたそうだ。

後日。
「此処が・・・あの人の居る館・・・」
少女は、二人の正体を追って、ガラコタの隣の町【レトサム】にある奇妙な館にたどり着いた。その名も、
「吸血館・・・物騒な名前の館ね」
北向きという奇妙なその館は、入り口の側が常に日陰のジメッとした館だった。
「あの人・・・いるかな・・・」
彼女の名は【リナリア・ルフィス】という。先日の事件の日から、執事に礼をするために正体を追っていたのだ。
「うーん・・・なんか入るの怖くなってきちゃった・・・」
「どうしたの？」

「ひぃ！」
門の前に立っていたためか、後ろに買い物帰りであろうメイドが立っていた。
「あ、その、この館にルイって名前の人居ますか？」
「類を知ってるの？　居るも何も、類は館で唯一の執事なんだから！」
「そ、そうですか・・・」
「ところで、類に何のよう？　私が案内するけど」
「え、良いんですか？　私、ルイさんにお礼がしたくて・・・」
「お礼？」
「はい。こないだ、強盗に人質にされた私を助けてくれたんです」
「そうなの？　あ、言い忘れてたけど、私は【零草神菜子（れくさかなこ）】よ。此処のメイド長してるわ。よろしく」
「あ、私はリナリア・ルフィスと申します。えと・・・東方の国の方なんですか？」
リナリアにとって、聞き慣れない名前だった。少なくとも、ギルバート王国の名前ではない。
「ああ、私のこの名前はお嬢様がつけてくれた名前。元の名前は知らないの」
「え・・・？」
「もう、そんなことといいじゃないの。案内するから、付いてきて」
「あ、はい」
館の中に入ったものの、内心ドキドキしていた。
（どうしよう・・・私ドジだし、ちゃんとお礼言えるかな？　なんか恥ずかしくなってきた・・・）
「お嬢様～、只今帰りました～」
「零草、この時間はお嬢様は寝てるんだから・・・その子は？」
「あ、あの・・・」
正しくあの時の執事だった。右目に着けているモノクル、整った黒髪、左目の下の泣きぼくろまでリナリアは覚えていた。

「なんか類にお礼がしたいとかで。前に強盗倒したことある？」
「んー、ガラコタで一回」
「じゃ、多分それ」
「あ、あの・・・先日は強盗から助けてくださって有難うございました！」
「ああ、あの時の・・・いや、無事でよかった。僕は、【八草類（やくさるい）】です。どうです？　この時間はお嬢様は寝てるし。お茶でもいかがですか？」
「え、いえ、私なんかが烏滸がましいです！」
「いいからいいから。類の淹れたお茶は凄く美味しいのよ！」
言われるがまま、リナリアは椅子に座る。
「ねえねえ、貴女何処から来たの？」
「ええと、ガラコタから」
「何歳？　私は十八」
「あ、私は十六です」
「ねえ、お菓子食べる？」
「零草、リナリアさんが困ってるだろ。少し落ち着け」
「はいはい。今日の紅茶は何？」
「落ち着く気、無いだろ。今日の紅茶はシンプルにダージリンですが」
リナリアは現在一人暮らしで、近所で適当な仕事をしていた。だからだろうか、リナリアは突然立ち上がり、類に言った。
「わ、私が此処で働くにはどうしたらいいでしょうか？」
「・・・？　此処で？」
「は、はい」
「働く？」
「・・・はい」
「うーん、メイドとしてならアリだけど、お嬢様に話を通さないといけないな・・・」
「お、お願いします！」

「でも、此処で働くのは結構キツイよ？　お給料は良いけど」
「確かに、メイドといっても此処の仕事は特殊だからね。働くなら住み込みをおすすめする。はい、紅茶」
「あ、ありがとうございます」
　リナリアは紅茶を口に含んだ。貰った紅茶は、リナリアが今まで飲んだどの飲み物よりも美味しかった。
「紅茶、ありがとうございました。では・・・」
　リナリアは自分の住所を伝え、帰っていった。

「・・・類？　どうしたの？」
「いや、紅茶の葉を少し入れすぎてしまった気がして」
「気にしすぎだって」
「お嬢様なら、きっとあの子のことＯＫするだろうな」
「そうね。そうなったら私の部下ね！」
「ああ、あの子は、簡単に辞めたりはしないだろうし立派なメイドにしてあげてくれ」
「もちろんよ」
　類は、紅茶を飲みながら神菜子に言った。
「ただし、お嬢様の正体は隠しておけよ」
「ただの人間には知らせない、でしょ？」
「ああ、お嬢様の正体はなるべく隠さないといけない」
「そうね。でも、それは類も同じよ？　貴方も正体を知られたら危ないわ」
「僕は大丈夫・・・自分でどうにかするさ」
　そう言って、類は懐中時計を取り出した。
「・・・あともう少しでおやつの時間だ。お嬢様が起きる。準備を

しよう」

二人は、部屋を出た。

執事、散歩する

「くかー・・・くかー・・・すぴー・・・」
　此処は寝室。眠っているのは、この館の主【アニマ・シェイドル】である。先日の事件のとき、類が付き添っていた幼女だ。
「お嬢様、おやつの用意が出来ました」
「・・・ん、うーん。神菜子？　ふあぁ・・・今日のおやつは何？」
「パンプキンプディングです。ハロウィンも近いので」
「やった。プリン大好き」
「さあ、行きましょう」
「ぅわーい！」
　こうしていると、ただのお嬢様にしか見えないが、アニマには神菜子と類しか知らない秘密があった。
「どうぞ、お嬢様。お飲み物は・・・？」
「んー、紅茶が良い。類が一番上手いダージリンを淹れて」
「了解」
「お嬢様、今日メイド希望の方が来ました。リナリア・ルフィス、十六歳。がラコタ在住で、強く此処で働くことを希望しています」
「んー、採用」
（即答！？）
（即決！？）
「でも、一回会って話しておきたいわね。いわゆる『めんせつ』って奴？」
「では、いつ面接を行うか連絡するので、決めてください」
「明日」
（また即答・・・）
「で、ではそう伝えておきます」
「うん。よろしくね」

そして、翌日。
「こんにちは。今日から吸血館メイドになったリナリアです！」
「まさか・・・お嬢様が挨拶しただけで面接をやめるとは思わなかった・・・」
「まあ、飽きっぽいしね。お嬢様は」
吸血館では、リナリアがすでにいる使用人に挨拶して回っていた。
「それにしても、随分やる気あるわよね。彼女」
「皆最初はあんなもんじゃないか？　まあ、零草が来たばっかの頃は少し例外的だけど」
「あら、私はまあ・・・ね。て、類も似たようなもんじゃなかったの？　類せ・ん・ぱ・い？」
「うん、まあね。さてと、リナリアのことは任せたよ」
「オッケー！　任しときなさい」
「僕は、お嬢様の散歩に付き合ってくるから」
「行ってらっしゃい。気をつけて」
「お嬢様に一番気をつけないと。危なっかしい」
類は、アニマと共に館を出た。
「類。今日は港に行くわよ！」
「絶対に海に落ちないで下さいよ。お嬢様が海に落ちたら確実に死にますよ？」
「大丈夫大丈夫。さあ、出発！」
そして、港。
「ふふ・・・この辺にはね、美味しいワインのお店があるのよ？」
「・・・まさかそれ目当てじゃないですよね？」
「まさか。別にちょいと抜けだして飲みに行こうなんて思ってないわよ？」

「思ってますよね。言ってくれれば付き合いますよ。どうせ一人じゃ買うこともできないでしょう」
「類ならそう言うと思ったわ。行くわよ！」
アニマの言う酒屋の前についた時だった。
「きゃあー！！！」
港でも強盗が現れたのだ。今度は集団だ。
「最近、治安が悪くなってきましたね」
「もしかして、また私ほったらかして強盗の相手する気？」
「しかし、野放しにするわけにもいかないでしょう？」
「もちろん。行きなさい」
「了解」
類は、内ポケットに隠した投擲用のナイフを取り出して、強盗に向かって走りだした。
（五人か・・・少し時間がかかりそうだな）
強盗は、二人がダガーナイフ。残りの三人が拳銃を持っていた。
「な、何だお前！　邪魔するな！」
類に気付いた強盗は、銃を向けて引き金に手をかけた。
「・・・遅いな」
「え？」
一人の拳銃に、類のナイフが直撃した。見事に拳銃を貫き、強盗の肩にも刺さった。
「ぐっ・・・あ・・・」
「おい！　ボルタ！」
「置いていけ！　俺らも捕まるぞ！」
「ちっ・・・」
強盗は散り散りに逃げてしまった。が、類は全員に向かってナイフを投げた。
「ぐぁ！」
「があッ・・・！」
「ぎゃあああ！」

だが、一人は持っていた現金入りカバンにナイフが当たり、無事だった。
「しまった！」
「ははは！　コイツを人質に逃げてやる！」
「えっ・・・！？」
強盗の一人は、アニマに向かっていた。
「止めろ！」
「ははははは！！！」
だが、アニマは動じなかった。
「・・・下賤ね。人間如きが私に手を出そうなんて、無謀にもほどがあるわ」
アニマが強盗を睨んだ瞬間類が、強盗にタックルをした。そして強盗が手離したカバンが、一瞬で真っ二つになり地面に落ちる。
「ッ・・・！　無事か！？」
「は？　な、何を・・・」
「・・・・・・」
カバンの中から、札束が飛び出す。中には、鋭利な刃物で斬られたような無残な紙幣もあった。
「お嬢様・・・」
「・・・悪かったわよ。少し調子に乗っちゃっただけよ」
強盗も、遠巻きに見ていた町民も何が起きたのか理解できなかった。駆けつけた警官によって強盗は捕らえられたが、やはり二人は警官の知らぬ間に消えていた。

「お嬢様、正体がバレるおそれがあるんです。簡単に能力を使わないでください」

「そういう貴方も、結構な頻度で使ってるじゃない」
「僕のは絶対にばれないから良いんです」
「それはずるい！」
二人は、裏路地で隠れて話していた。
「お嬢様・・・貴女、自分がどういう立場か分かってますか？　人間にお嬢様の正体がバレたら、大変なことになりますよ」
「それは貴方もでしょう。類、貴方だって私と同じなのよ？」
「・・・」
そう言って、類は持っていたカバンから一つのボトルを取り出し、アニマに差し出した。
「今日の分の血です」
「・・・ワインの代わりにはならないけど、貰っておくわ」
アニマは、差し出されたボトルの中身を一気に飲み干した。
「今日のは、濃厚でとてもいい味ね」
「死刑寸前の重罪人から抜いてきた血です」
そう、アニマの正体とは吸血鬼。それも、一週間に一度人間の血を飲まないと死んでしまう体質だった。ただし、血さえ飲めば不老不死に近い存在でもあった。幼女のような見た目も、不老の効果によるものだ。実際には、既に八百年生きている。しかし、姿と共に思考や感情もまた、幼女のようなまま止まっている。
吸血鬼は弱点も多く、不死といっても弱点を突かれれば相手が人間でも死ぬ。たとえば、アニマの日傘は弱点の一つである日光を避けるためだ。
「人間が罪を重ねれば重ねるほど、その血はより濃厚で美味なものになる・・・」
「僕には、分かりませんね」
類の正体もまた吸血鬼だ。しかし、彼は吸血鬼の中でも例外的だった。
「そうね、貴方は血を飲む理由が、私とは違うものね」
「はい」

類が血を飲む理由とは、生きるためではなかった。
吸血鬼は、一人一人に固有の超能力がある。吸血鬼は基本、自身の持つ魔力と引換に能力を使うことが出来る。しかし、類は違った。
「僕は元々人間ですから、能力を使うためにも血が必要なのです」
「私の血を輸血したから・・・ね」
そう、類は吸血鬼だ。だが・・・元人間なのだ。

メイド長、捕まる

類は、懐中時計を取り出して時刻を確認する。
「現在二時三十五分です。帰りましょう」
「そうね。此処に留まる理由もないし、寧ろ留まって警察に見つかるのもまずいわね」
「飛びますか？」
「めんどうくさい。抱っこして！」
「しょうがありませんね」
類がアニマを抱きかかえると、類の髪が白くなっていった。と同時に、目は赤く、犬歯は牙のように鋭くなっていった。
「最速で行きますよ」
「行っちゃいなさい！」
類は高く飛び上がり、背中から生えた黒い翼で羽ばたいた。
「人に見つからないように、念を押して高く飛んで行きましょう」
「好きにしなさい。ところで、今日のおやつは？」
「スイートポテトです。おかわりも用意していますよ」
「ぅわーい！」
二人は、暫くの間空中散歩を楽しんだ。
その頃、吸血館では・・・

「全く、俺の部下が捕まってから金が入らなくなった。このでかい館なら、金もタンマリあるだろうよ」
男の名は、【ガメール・スパロウ】。最近多発している強盗事件の強盗達の元締めである。

「ひひひひひ、さてと・・・銃もあるが、念の為こいつも持っていくか」
ガメールの手には、新品の大剣があった。
「逆らう奴は血祭り！　金目の物は全部俺のもんだ！」

「神菜子さん！」
「何？」
「なんでお嬢様のおやつ係が私なんですか！？　私料理できないんです！」
「えぇ！？　そうなの？　じゃ、じゃあ私がやるから、リナリアはテーブル準備を手伝ってきて！」
「は、はい！」
リナリアは着慣れないメイド服を気にしながらティールームへ走っていった。
「あー、館の中は走っちゃあ・・・聞こえてないか」
そう呟いて、神菜子は厨房へ向かった。
「えーと、さつまいもは・・・あったあった」
その時、厨房の窓の外をガメールが通りすぎるのを神菜子は見てしまった。男の携えた剣に驚いた神菜子は、声を上げてしまった。
そして、ガメールが神菜子の方を振り向いた。ガメールは銃を片手に、窓を割り侵入した。
「みぃたなぁ？」
「ひっ・・・」
厨房にほかの使用人は居ない。神菜子とガメールの二人だけだ。
助けを呼ぼうにも、扉は一つ。侵入してきたガメールの背後だ。
「丁度良い。この館の貯蓄は、何処に保管してある？」

ガメールは神菜子の顎に銃を突きつけて聞いた。
「ち・・・地下図書館の、隠し部屋です・・・」
「ん～・・・嘘を吐いてるかもしれんしな。付いてこい！」
「きゃあ！」
ガメールは、神菜子の腕を後ろ手に掴み、こめかみに銃を突きつけて歩き出した。
「い、痛い・・・離して！」
「駄目だ。お前を盾に、金を奪って逃げてやらァ」
「そ、そんなこと・・・」
神菜子は抵抗出来なかった。いつ殺されるか分からない状況で、出てくるのは涙だけだった。
二人が厨房を出ると、ガメールは外に居た使用人に向かって叫んだ。
「お前ら！　そこを一歩も動くんじゃねぇぞ！　誰かが動いたら、こいつの頭ぶち抜くからな！」
「ひぃっ・・・」
使用人たちがざわめいた。
「メイド長！？」
「皆・・・逃げ・・・」
「逃げるんじゃねぇぞ！　動いた奴も撃つからな！　よく覚えておけ！」
そのときだ。ティールームから、リナリアが帰ってきてしまった。
「！　リナ・・・」
「え・・・？　な、なんですか？　これ・・・」
「動くな・・・そこから動いたら殺すぞ！」
「リナリア、動いちゃ・・・ダメ・・・」
ガメールは、銃をチラつかせながら、地下への階段へ向かった。
（このままじゃ・・・お嬢様のお金が・・・）
その時丁度、外で類たちが降り立っていた。

「中が騒がしいわね」
「また誰かが何か壊したんじゃないですか？」
「まあ、その程度ならどうでもいいけど」
「いや、駄目ですけどね。さて、入りま・・・」
「？　どうしたの？　！？　神菜子！」
吸血鬼の五感は、一般的な人間のそれとは比べものにならないいう。類が吸血鬼の目で見えたのは、扉の僅かな隙間から見えた、ロビーで銃をチラつかせる男だった。
「・・・お嬢様、すいませんが此処にいてください。危険です」
「なにをっ・・・」
類が、自身の持つ能力を発動した。
「【スウィートタイム】、甘い時間を永遠に」
類が持つ吸血鬼の能力とは、時を操る能力【サイレント・タイムキーパー】。今使った【スウィートタイム】は、自分以外の全ての時間を止める技である。強力な分血の消費も激しく、使える時間は限られている。
類は、全速力で館に入ると、技を解除し、同時にナイフを構えた。が、投げることは出来なかった。
「！　零草・・・！」
僅かな隙間からは、ガメールが神菜子を捕らえているのは見えたが、タイミングが悪かった。類が入ったとき、神菜子はガメールの盾となる位置に居たのだ。
「なんだ？　お前は・・・？」
「類・・・？」
類は動くことが出来なかった。下手に動けば神菜子が危なかった。
「・・・誰だ？」

「分からない・・・」
類の正体を知っている神菜子以外は、類が自分たちの上司だとは夢にも思っていないようだ。
「誰だかしらないが、お前も動いたら殺すぜ」
「くっ・・・」
類は、【スウィートタイム】を使おうとした。が、血が足りなかった。もう一度使うためには、誰かの血を吸わないといけない。
ガメールが地下へ降りるまで、類は一歩も動かなかった。否、動けなかった。

強盗、怪物を見る

ガメールが地下に降りたあとも、使用人たちは動くことをしなかった。

「どうする・・・」

「殺されるの・・・？」

類も内心焦っていたが、出来るかぎり冷静に神菜子を助けてガメールを捕える方法を考えていた。

（【スウィートタイム】には血が足りない。だが、【スウィートタイム】でないと・・・）

類の能力【サイレント・タイムキーパー】は、時を操る能力ではあるが、強力な分制約が多い。

類が作った技は現在五つ。時を止める【スウィートタイム】、時を長くする【タイムキープ・ロング】、時を短くする【タイムキープ・ショート】、時を逆行させる【タイムリープ】、時の道を作りナイフを操る【リッパー・ザ・リーパー】である。この中で、人間などの生物に干渉できるのは、【スウィートタイム】と【タイムキープ・ロング】、【タイムキープ・ショート】の三つだ。

（実質時の流れが速くなる【ショート】は使えない。【ロング】は、時間の流れは遅くなるがそれほど効果もないし・・・。一か八か、【リッパー・ザ・リーパー】で倒すしか・・・）

その時だった。

「随分長い間待たせるのね」

「お、お嬢様・・・」

痺れを切らしたアニマが、日傘をくるくると回し、不機嫌そうな顔で類に近づいていった。

使用人たちがざわめく。付き添っていた類が不在していると思っているからだ。

アニマは、類にそっと耳打ちをした。

「私の生き血ボトルがあるでしょう。あれを使いなさい」
「し、しかしあれは・・・」
「良いの！　同じ量、いやそれ以上を、私の可愛い使用人を危険に晒した馬鹿な男から絞りとるから！」
そう言うと、アニマはカバンからボトルを一つ取り出し、類の口にねじ込んだ。
「もがっ・・・！？」
「一気飲みよ、いっき！　飲んで荒れて倒しちゃいなさい！」
「うっ・・・ぷはぁ・・・了解、しました」
類は、再びナイフを持ち直し、地下図書館へ向かった。
「お嬢様！　誰なんですか？　あの男は」
「ふふ、私が一番信頼している男よ」
アニマは不敵に微笑んだ。
（信じてるわよ。類・・・）

「もう図書館には入ったか・・・」
図書館の扉は開いていた。その上、中から声が聴こえる。
「隠し部屋は何処だ？」
「ひぃっ・・・」
類はナイフを握りしめた。
「【スウィートタイム】！　甘い時間を永遠に」
時が止まり、それと同時に類が図書館に入る。入口のすぐ傍で、神菜子に銃を突きつけているガメールが居た。
「【リッパー・ザ・リーパー】！　夜を裂き、血の花よ咲き誇れ」
投げたナイフが、全てガメールが銃を持つ右腕に向かう。
「時よ、動け」

ナイフが、勢い良く腕に突き刺さる。
「ぐぁああ！！！　な、なんだ！？」
「類！」
白い髪に白い肌、その中で一際目立つ赤い目を光らせて類はガメールに言った。
「お前には罪が三つある」
「は・・・？」
「一つ、この館の財産を狙ったこと」
そう言って類がナイフを投げると、不規則に動きながらガメールの銃をはじき飛ばした。
「なっ・・・にぃ！？」
「二つ、使用人たちを脅迫した」
類はナイフを当然のように投げる。ナイフは二つ、ガメールの膝に刺さった。
「ッ・・・！　痛い・・・いでぇ！」
「三つ、零草を泣かせたことだ」
類の投げた三つのナイフが、ガメールの服を引っ掛けながら壁に刺さる。
「さて、本当は僕が止めを刺したいところだが・・・お嬢様の命令だ。お嬢様に譲ろう」
「な、なんなんだ・・・！？　おい！　どうする気だ！」
「お嬢様、準備が整いました」
「上出来よ。類」
入り口の裏から、アニマが現れた。
「さて、罪を重ね続けた重罪人の血・・・存分にご賞味下さい」
「・・・頂きましょうか」
思わず、類も神菜子も震えるほどの狂気じみた笑みを浮かべ、アニマはガメールの首に噛み付いた。
「あ！　あぁあ！　あぁあああああああ！！　た、助けてくれェ！　あ・・・が・・・」

暴れていたガメールの動きが徐々に鈍くなり、遂にピクリとも動かなくなった。
「・・・はぁ！　御馳走様。名も知らぬ男」
「では、処分しておきます」
ゾンビと化したガメールの首根っこを掴み、隠し部屋に入っていった。隠し部屋には、厳重に絞まった箱がいくつも並んでいる。
隠し部屋にも上へ続く階段はあり、その階段はアニマの寝室の近くにある窓しかない隠し部屋に続いていた。
「消えろ。名も知らぬ重罪人よ」
類はガメールを窓から外に放り投げた。日光に当たったガメールの体は、一瞬で灰になってしまった。
「貴方の狙っていた財産は、貴方が手を出していい程安くありませんでしたね」
類は静かに、階段を降りていった。

執事、正体バレる

類は、人間の姿に戻ると、図書館の椅子にもたれかかった。
「はあ・・・時を止めるのには、血が足りなさすぎる・・・節約するべきか・・・」
「類。あとは私達が何とかするから、そこで休んでなさい」
「・・・はい。お嬢様」
「行くわよ。神菜子」
「はい」
アニマと神菜子は、使用人たちの居るロビーへ上がっていった。
「！　お嬢様！　メイド長！　ご無事で！？」
「ええ、無傷よ」
「おかげ様で・・・」
「ご、強盗は・・・」
「ああ、強盗なら倒したわよ。だから、しばらく図書館は立入禁止ね」
「それって、大丈夫なんですか？」
「大丈夫よ。縛っておいたし、あとで警察に突き出しとくわ（嘘だけど）」
「そうですか・・・」
皆、強盗のことに気を取られて吸血鬼の姿の類のことを気にしていなかった。その中でただ一人、リナリアだけが吸血鬼の姿の類について考えていた。
（あの人は一体・・・？）
この件は、アニマの虚言でその騒動は一段落した。
そして、その夜。

「いい！？　類。貴方に重要な仕事を頼むわよ」
「はい。なんでしょう」
「今日のワイン、やっぱ買ってきて。酒屋だから今もやってるはずよ」
「・・・今もう午前二時ですよ？」
「良いの！　私はあれが飲みたいの！」
「しょうがないですね・・・では、買ってきます」
「超特急で！」
「了解」
類は外に出ると、吸血鬼の姿になった。夜の闇に紛れ、類は空高く飛び上がって酒屋へ向かった。
「やはり・・・夜のほうが動きやすい」
元人間の吸血鬼である類は、吸血鬼の性質が少し欠けていた。日光にも当たっても灰にはならず、流水にあたっても死なない。吸血相手の血を飲み干せば、被吸血者ゾンビになるが、致死量吸わなければ被吸血者も人間のまま生きていられる。類は、長所も短所も中途半端な吸血鬼なのだ。
しかし、吸血鬼の本能である夜を好む性質は変わらなかった。
「このままひとっ飛びで・・・！」
酒屋の近くまで行った類は、人間の姿になり着地した。
そして、注文されたワイン（十三種類）を買い、再び飛び立った。
吸血館の前まで来た時、ある事件が起きた。買い物袋の中からワインが一本落ちてしまったのだ。
「まずいっ！」
とっさに手を伸ばしたが届かず、低空飛行の体制でワイン瓶を手に取ったその時、
「・・・え？」

「あ、あの時の・・・！」
リナリアが、館の入り口から外を覗いていたのだ。
吸血鬼の姿を見られたが、それだけならまだ良かった。此処は館の目の前、逃げるにも逃げれる場所ではない。
「あ、いや・・・」
「あの！　貴方は誰なんですか？」
「いや・・・その・・・」
「もしかして、強盗を倒したのも・・・」
「その・・・」
「・・・！　その服・・・泣きぼくろ・・・まさか！？」
「！？」
「八草・・・さん？」
バレてしまった。それはそうだろう。視力も上がり、必要のないモノクルは外してるとはいえ、泣きぼくろは消せないし、吸血館専属執事しか着れない特注の制服に気付かれれば言い逃れはできない。
「そう・・・だよ。僕は類だ」
「そ、その姿は・・・？」
本当のことを言うべきか、類は迷った。もし言えばアニマの正体も悟られかねない。だが、言い訳が思いつかなかった。
「こ、これは・・・」
「私が説明してあげましょうか？」
「！　お嬢様！？」
類が帰ってきたときには気付かなかったが、アニマは屋根の上に佇んでいた。
「お嬢様・・・そんなところに！」
「リナリア、これを見なさい」
そう言うと、アニマは大きく翼を広げた。
「ッ！？」
「まだこれからよ」
アニマは飛び降りると、リナリアの目の前に着地し、地面に手を

ついた。
「【シャドー・コンサート】」
アニマの能力、それは影を操る能力【シャドー・コンダクター】だ。
地面の館の影から、様々な楽器の形の影が浮き出る。
「私は吸血鬼。類も吸血鬼。それが答えよ。リナリア」
「吸血鬼・・・」
「お嬢様！　何故言ってしまうんですか？」
「良いの。リナリアは信用できるわ。付き合って一日だけど分かるわ。さあ二人とも。私の演奏を聞きなさい！」
そう言うと、アニマは指揮棒を振るように腕を動かした。それに合わせて影の楽器が音を奏でる。
「どう？　リナリア。私達の秘密、内緒にしてくれる？　貴女が私たちの正体を言っても、私たちはあなたに危害は加えない。でも、貴女が正体を言うことによって、私達が危険にさらされることを考えて」
「え・・・」
「ちなみに、この秘密を知ってるのは貴方を除けば神菜子だけね。黙っててくれる？」
「私は・・・はい。黙っています」
「・・・合格♪　貴女を正式に雇うわ」
「え・・・？」
「お、お嬢様・・・？　何を？」
「リナリア・ルフィス、貴女を吸血館専属メイドとして正式に雇うわ。これからもよろしくね」
「え、あ、はい！」
それを見ながら、類は戸惑いながらも微笑んだ。
（まさか、こんな解決法を使うなんて・・・さすがお嬢様というべきか）
三人は、揃って館内へと戻っていった。

その頃、隣国にて・・・

「そいつを捕まえろー！！！　絶対にだ！」
夜の闇の中を疾走する影が一つ。
「俺が捕まる？　冗談言うなよ。俺にお前ら下等生物が敵うかってんだ」
「なにをっ！？」
「【ブラッド・プリズン】！」
走る男が、追ってくる警官に向き合い手をかざしたその瞬間、警官と男の間に真っ赤な檻が出来上がった。
「そんじゃ、さようなら～」
「待て～！　ルナド！！！」
男の名は【ルナド】。大怪盗の肩書きを持つ大悪党だ。
ルナドは、手元の紙を見ながら次の標的を選んでいた。
「さてと、次は何処のお宝を盗むかな、っと・・・ん？　世界最古の書物、シェイドル図書館に保管中、か・・・良いねぇ。決まりだ！」
シェイドル図書館、それは吸血館地下の図書館のことである。
「待ってろお宝！　俺の手に入れてやる！」

怪盗、目撃される

翌日の朝。
「おお！　このオニオンサンドすげえ良いな！」
ルナドはレトサムに到着していた。現在、とある喫茶店で朝食を食べていた。
「いやあ、うちのサンドイッチをそんなに褒めてくれるなんてねぇ」
「言っとくが、お世辞じゃねえぜ。俺は食いもんには五月蝿いんだ」
ルナドは店主と談笑しながら、大量のオニオンサンドを食い尽くした。
「さてと、そろそろ行くかな、っと」
「おや、もう行っちゃうのかい？」
「ま、仕事があるんでね」
テーブルに置いていたソフト帽をかぶると、ルナドはジャリッとした無精髭を撫でながら店を出た。
「今日の天気は曇り！　良いねえ、快適だ」
不敵に笑うと、ルナドは吸血館へと向かった。
その頃、吸血館では・・・

類は、自室で眠っていた。現在、午前八時。
吸血館の使用人は、アニマの生活リズムに合わせて行動している。アニマも吸血鬼の本能には逆らえず、夜行性である。
類は、普段ならこのままアニマの起きる十二時の少し前、十一時ごろに起きるであろう。しかし、先日リナリアに正体がバレたことが心配で、類は寝不足だ。執事として寝坊は許されないが、苦しい

ところである。
その頃神菜子は、既に起床していた。
「・・・コーヒー飲も・・・」
自前のコーヒーセットでテキパキとコーヒーを作ると、細かく砂糖の量を調節して飲み始める。
「ふぅ・・・よし、目が覚めた。あ、ティールームに忘れた本取ってこよ」
神菜子は文学少女だ。暇さえあれば図書館に入り浸っているほどだ。自室の本棚も、分厚い本でいっぱいである。
神菜子は、静かに廊下を渡り、階段に向かっていた。
当たり前だが、このときアニマは寝室でグッスリと眠っていた。
次に起きるのは、3時のおやつ前だろう。

「此処が、シェイドル図書館か」
ルナドが、吸血館に到着した。吸血館には門番が居ないため、ルナドを警戒するものは今居ない。
「さてと、おっじゃましまーっす」
ルナドは門を通り、吸血館へと侵入した。
（さて・・・何処が入り口だ？）
ギルバート王国の一般的な図書館は地下だ。しかし、先日ルナドは別の国の大図書館に入っていて、その図書館はロビーから見える一階にあったため、ルナドは図書館への階段に気付いていない。
（あー・・・捜索するか）
ルナドは、階段を素通りして館の中へと入っていった。
（それにしても人が居ないな。ま、念の為どっかで変装しとくか）

（み、みみみみ見てしまった・・・！）
神菜子は、二階から一階へ降りる階段で隠れていた。ロビーに入るルナドを見たのだ。
（やっぱり門番置いたほうが良いよ・・・二日連続で不審者侵入だよ・・・）
神菜子の意見はもっともなのだが、アニマは夜に自由に行動できないとして門番を置いていない。それならアニマの寝てる日中だけでも置けば良いのだが、何故かアニマが断固として首を縦に振らなかったのだ。
少し様子を伺いながら、神菜子は引き返した。この状況では図書館に行くことは出来なかった。ルナドの目的を知らない神菜子にとっては、昨日のように危険な目にあう可能性が否定出来なかった。
神菜子は類の部屋まで行くと、扉をノックした。しかし、熟睡している類の返事はない。
（どうしよ・・・お嬢様を起こすわけにもいかないし、類の部屋に入ってまで起こすのは・・・）
神菜子とて乙女である。男子の部屋に平然と入るような勇気は持ち合わせていない。
神菜子が類の部屋の前で右往左往している、その時だった。
「あの・・・メイド長？」
「あ、リナリー」
リナリーとは、リナリアのことである。神菜子が勝手に、そう呼び始めたのだ。本人も気に入っているらしい。
「どうしたんですか？　こんな所で」
「いや、実はね・・・」
リナリアに神菜子が事情を説明する。少しずつリナリアの顔色が

悪くなっていく。
「そ、そうなんですかー・・・」
「あ、ちょっと帰んないでよお！　私もめっちゃ怖かったんだから！」
「どんな感じの人だったんですか？」
「帽子被ってて顔分かんなかったけど、無精髭凄かった」
「怪しいですね・・・」
「どうしよう・・・放っておくわけにもいかないけど、私達だけじゃ何も出来ないよね？」
「そうですよね」
「あ、そうだ！」
神菜子が、なにか思いついたように立ち上がった。
「お嬢様に昨日、何かあったら使えって言われて渡されたものが・・・あった！」
神菜子のメイド服のポケットから出てきたのは、奇妙な模様が描かれた球だった。
「・・・それをどうやって使うんですかね？」
「・・・分かんない」
「・・・」
二人はしばらく、その場に留まっていた。

「一体何処にあるんだ！」
地下への階段を見落としたルナドは、現在吸血館一番奥の部屋【コンサートホール】に居た。
「変装しようにも何すればいいか分からんし、図書館が何処かも分からんし！　一体どうなってんだ此処は。図書館は何処だ！？」

ルナドは、入り口目前の階段のことを覚えていない。
「もたもたしてると見つかっちまうな・・・一旦退散するか」
神菜子に目撃されてるとは気付いていないルナドは、ロビーへ向かった。そして、地下への階段をようやく見つけた。
「此処は、行ってないな・・・降りるか」
ルナドは、ようやく見つけた階段を降りていった。

「そうだ！　今立入禁止になってる図書館、あそこなら大丈夫じゃない？」
「え・・・図書館ですか？　でも、あそこは・・・」
「大丈夫よ。きっと」
「じゃ、じゃあ行きましょうか」
「よし！　決まり！」
神菜子とリナリアは、ルナドが降りた後とは知らずに地下図書館へと向かった。

メイド、遭遇する

「ここか・・・」
ルナドは、閉ざされた図書館の扉を押し開け、中に入った。
「すげえ量の本だな・・・見つかるか？　これ」
シェイドル図書館は、月に四回町民にも公開され、その度に人が押し寄せるほどの図書館だ。蔵書数はギルバート王国の南の地域一と言っても過言ではないだろう。
その中から、決まった一つの本を探すのはヒント無しではかなりの難関である。
「やっぱり、変装でもしてこの館の使用人にでも聞いたほうがいいか？」
ルナドが考えたそのとき、入り口から物音が聞こえた。
（まずいっ！　人か！？）
人気のしない館に油断し、人が来ることを予測していなかったルナドは、適当な本棚の裏に隠れて様子を伺った。
「ここなら大丈夫でしょ！」
「そうですね」
神菜子とリナリアは、本棚の裏のルナドに気付いていない。
（まずい！　そこで止まるんじゃねえ！　逃げるに逃げれねえじゃねえか！）
「ま、今考えると寝ぼけて、見間違えたのかもしれないけど」
「え、そうなんですか？」
「・・・そう思いたい」
（ま、まさか俺見られてた！？　それこそ逃げるに逃げられなくなったぞ・・・俺）
「でも、本当にいたらここから出るに出られないね」
「怖いですね・・・」
（こっちもだわ！　お願いだから早く出てってくれ・・・）

その場にいる全員が、図書館から出ることができなくなっていた。
これは、ルナドに対して危機的状況だ。
（くそっ。なるべく使いたくない手だったが・・・仕方ない）
ルナドは、ポケットから試験管を取り出すと、中に入った赤い液体を床にばらまいた。

「？　なんか今音しなかった？」
「さあ・・・聞こえませんでした」
「なんか・・・水が溢れる音と言うか・・・」
神菜子は、分厚い文庫本を読みながらリナリアと話していた。
「こ、怖いこと言わないで下さいよ！」
「あ、ごめん」
そのとき、神菜子の背後から真っ赤なコウモリが飛び出してきた。
「ッ！？　きゃあああ！！」
「あ、赤いコウモリ！？　逃げましょう！」
「ど、どうしてもコウモリは苦手なの！　本当に！　主に顔！」
「と、図書館から出ますか！？」
「もう知らない！　自分の部屋戻ったほうが安心できるわ！」
「わ、私も・・・」
真っ先に逃げた神菜子に続き、リナリアも図書館を出た。
そして、本棚の後ろからルナドが入り口を見つめていた。

「行った・・・な」
ルナドが本棚の裏から出ると、コウモリが試験管に群がり、液体となって試験管の中へ入る。
「ふぅ・・・お宝を目の前で逃すのは癪だが・・・見られてるからなあ。しょうがねえ、今日のところは退散するか」
ルナドが図書館を出て、入り口から出ようとした。が、ルナドの肩を何者かが叩いた。
「・・・は？」
「何をしているかはしりませんが、僕の安眠を妨害した罪は重いですよ？」
ルナドの肩に手を置く類の背後には、神菜子とリナリアが立っていた。
（あ、あの小娘！　仲間を呼びやがった！）
「零草の悲鳴で目が覚めたと思ったら、館内に不審者侵入。僕は二度寝ができない体質なので、寝れるはずだったあとの三時間の分は無駄になってしまったわけです」
「あ、いや・・・俺は今から帰るとこ・・・」
「不法侵入した時点で罪人！　一先ず捕らえて、お嬢様に献上です！」
類は、ナイフを取り出して構える。寝起きでモノクルを着けていない類は、視力の補正のため吸血鬼の姿になる。
「！　その姿・・・そういうことか。戦う理由ができたってもんだ」
ルナドは、急に逃げることを考えるのをやめた。
「吸血鬼・・・か。良いねえ。やってやろうじゃないか」
「？　何故吸血鬼だと分かった」
「知らなくていいさ。直に分かるからな」
そういうと、ルナドは試験管の中の赤い液体を再びばら撒いた。
「【ツェペシュ・スピア】すべてを貫く深紅の矛を！」
赤い液体が形を変え、矛の姿で固まった。
「！　能力者・・・！？」

「お、いいねその反応。まるで同類を見るのが初めてじゃないみたいだな」
「同類って・・・まさか！？　類と同じ・・・」
「そうさ。俺も吸血鬼さ。ドラクルの子、ヴラド・ツェペシュの末裔！　ルナド様だ！」
　ルナドは、矛を振り回すと、類の方へ構えた。
「本当は戦いに興味はないんだが・・・同類となれば話は別だ。行くぞ！」
　類が投げたナイフを、ルナドが叩き落す。そんな動作をしばらく続けていた、その時。
「！？」
「！？」
　一瞬の出来事だった。類の構えていたナイフとルナドの矛が同時に、何かで弾き飛ばされた。
「なっ・・・！？」
「どういうことだ・・・？」
　類は、直感した。誰がナイフをはじき飛ばしたか、を。
「・・・お嬢様ですね？」
「良く分かったわね」
　寝間着姿のアニマが、階段をゆっくりと降りてきていた。
「お嬢様！　何故こんな時間に・・・」
「久しぶりに気配を感じ取ったから・・・かしらね？　久しぶりね、ルナド」
「えっ・・・」
　類、神菜子、リナリアが固まる。
（お嬢様とルナドが・・・知り合い？）
「ちっ、聞き覚えのある名前だと思ったら、シェイドルってお前のことか。アニマ・シェイドル！」
「何年ぶりか忘れたけど、また殺されに来たのかしら？」
　物騒な話をするこの二人の関係は、およそ三百年前に始まった。

それは、ある国の舞踏会会場でのことだった。

怪盗、逃げる

三百年前・・・
「さて、ここか・・・オルヴェルグの涙があるのは」
ルナドは、大富豪主催の舞踏会に忍び込んでいた。狙いは、巨大なダイアモンド【オルヴェルグの涙】だ。
「ひひっ。あの程度の警備ならチョロイな」
ルナドが、誰にも気付かれるようにひっそりと、台の上に飾られたダイヤを抜き取り、警備員の目を盗み逃げた。
「ちょろいもんだぜ。さて、帰るか・・・」
その時、ルナドの前方から小さな影が現れた。アニマだ。
「その手に持ってるもの、今日私が買い取るはずだったものよ。返して頂戴」
「は？　やだね。これは俺のもんだ」
「なら、力尽くで奪うわよ」
「やってみろ、小娘」
「・・・いまなんつった？」
「小娘」
次の瞬間、ルナドの右腕から血が吹き出した。
「・・・は？」
「もう一度言うわ。そのダイヤを返しなさい」
アニマの目は、幼女のそれではなかった。まるで、獲物を狩る獣の目だった。
「くっ・・・何したか知らねえが、血があれば俺だって！」
ルナドも、右腕から吹き出した血を針状に変形させ、アニマに殴りかかった。
しかし、アニマはそれを軽く避けると、余裕のある様子を見せつけた。
「血を操る能力というところかしら。貴方、吸血鬼ね」

「だったらどうした！」
ルナドの能力は、持主の体外にある血液を変形させる能力【ツェペシュ・ザ・ドラクル】だ。アニマには、それが見破ることは容易かった。
「悲しいわよ・・・種類は違うとはいえ、同じ種族の吸血鬼がこんな犯罪行為に手を出しているとはね。罰を与えるわ」
「は・・・？」
アニマは、高く飛び上がるとルナドの方へ手をかざした。
「【シャドーメイデン】愚者に厳しい苦痛を」
ルナドの足元の、木の影から鉄の処女のようなものが飛び出し、ルナドを閉じ込めた。
「鉄の処女と違って、それの針は私の気まぐれで量が変わるのよ。さて、ダイヤを返す気は？」
返答の代わりに、ルナドはメイデンを破壊して逃げ去った。メイデンのあった場所には、ダイヤがぽつんと置かれていた。
「・・・まあ、良いか」
アニマは、ダイヤを手にすると会場には行かずに去っていった。

「と、言うことがあったわけよ。その後、ルナドの正体に気づいた」
「俺もだ。その次の日に、アニマが新聞に出てるのを見て正体に気づいた」
「そして思ったのよ」
「そして俺は思った」
「いつか悪行の罰を与えてやろうと！」
「いつかあの時の復讐をしようと！」
「覚悟はできてるかしら？　ルナド」

「それはこっちのセリフだ」
二人をただ呆然と見る三人は、ヒソヒソと話していた。
「なんか、僕が出てきた意味がなくなってきたような・・・眠いし」
「ていうか、放っておいて良いの？　お嬢様も泥棒も」
「私にはちょっと・・・」
「いや、駄目だと思う。お嬢様を好きに暴れさせたらまずい。勢い余って外にでも出たら・・・」
そんな三人の言葉など耳に入らない二人は、戦闘態勢に入る。
「類、手を出さないでよ」
「・・・はい」
類の返事を聞くと同時に、アニマは動き出した。
「【シャドー・ノイズ】！」
アニマの足元から波紋のように影が広がり、ルナドの足元まで届く。
「響け」
「ッ！」
ルナドの足元の影が突き出し、ルナドをはじき飛ばした。
「まだよ！　【シャドー・クロー】！」
「させるか！　【フライング・スピア】！」
影で覆われたアニマの爪と、ルナドの飛ばした槍がぶつかり合い、槍が吹き飛ぶ。
「なっ・・・！？」
「終わりよ！」
アニマがルナドの喉元を切り裂こうとしたその時だった。
「な、なに？　どうして・・・」
「おい！　離せ小僧！」
類が、間に割って入った。
「そこまでです。執事として、それ以上お嬢様が踏み込むことを阻止します」
「くっ、そこをどきなさい！　邪魔よ！」

「・・・ルナド。二度とこの館に近づかないで下さい。次に来たときには、僕が全力で御相手しましょう」
この時の類は、神菜子とリナリアが思わず震えるほどの殺気を放っていたという。
「・・・ちっ、分かったよ。そもそも、俺は逃げるつもりだったんだからな」
捨て台詞を吐いて、ルナドは忽然と消えた。
「なんで止めたの？　手を出すなといったはずよ」
アニマは、玩具を奪い取られた子供のように類を睨みつけた。しかし、類は表情を変え、心の底から心配するような声でアニマに言った。
「お嬢様があのまま踏み込んでいれば、お嬢様は勢いに任せ・・・」
そう言って類は、アニマの進行方向へ歩いていった。
「ここまで、来ていたでしょう」
アニマは、気付かぬ間に館を飛び出していた。類の立つ位置は、空が晴れてできた日向だ。
「僕は、ただお嬢様が心配なだけです」
「・・・もういいわ。私はもう一回寝るから、三時になったら起こして」
「了解しました」
アニマを寝室まで送り、類は二人の待つロビーへ戻っていった。
「はぁあああああ・・・」
類が深くため息を吐くと、神菜子が類に近づいていった。
「あの二人の間に入るなんて・・・無茶なんだから」
「そうでもしないと、お嬢様は止まらない」
「まあ、そうだけど・・・」
類は、館の外を見て呟いた。
「お嬢様に門番を雇うように頼んだほうが良さそうだ」
そして、三時。

「お嬢様、今日のおやつはモンブランです」
「あら、美味しい」
おやつでご機嫌を取ったあと、類はアニマに囁いた。
「今日のルナドも、昨日の強盗も、門番が居れば防げたかもしれません。お嬢様、お嬢様が寝ている日中だけでも、門番を雇いませんか？」
「・・・そうね。こうも立て続けに事件が起きると、その必要もあるかも知れないわね。実際、神菜子を危険に晒してるし・・・。良いわよ」
アニマが、遂に門番について承諾した。だが、後日雇われた門番がさらなる事件を起こすことを、アニマたちはまだ知らない。

門番、微笑む

「どうも、こんにちは。この度門番としてやってきました、【ビブル・フライ】です」

類の目の前に立つ男は、にこやかに類に挨拶をする。今回雇われた門番だ。

「どうも。よろしく頼みます」

この門番が見つかるまで、類は街中に門番募集の張り紙を貼るという重労働をしていたため、顔には疲れの色が見える。

ビブルが門番の仕事に就くと、類は吸血館を出てある場所へ向かった。

向かった先は、【ソル・クロック】という名の時計屋だ。見た目はまるでお化け屋敷のように不気味で、入店するものは殆ど無い。

「おじょまします」

「！　あらぁ、類くん！　久しぶりぃ」

薄暗い店内のカウンターから、店主【朝日諏訪子（あさにち すわこ）】のだらけきった声が発せられる。ちなみに、類や神菜子と違って本名である。

諏訪子は凄腕の時計技師で、自作の時計も作れるほどの腕を持っていながら自営業の時計屋の店主に落ち着いている。本人曰く、カウンターでコーヒーでも飲んでるのが楽しい、のだそうだ。

濃いくま、丸ブチメガネ、不毛だらけのボサボサ頭で不健康そうな容姿だが、実際はかなりの美人である。が、引きこもって誰にも会わないので問題はない。

「お久しぶりです。頼んでおいた品は、できてますか？」

「出来てるよぉ。自信作に仕上がってるからぁ、大事に使ってねぇ」

諏訪子は、類に新品の懐中時計を手渡す。裏には、χρ（クロノ）？νο？（ス）の文字が彫ってあった。

「想像以上の出来ですよ。諏訪子さん」

「でしょでしょぉ？　お代はぁ、材料費八百ギルぅ、制作費千三百

ギルぅ、それと気分でプラス五百ギルでぇ、しめて二千六百ギルよぉ」
「じゃあ、はい」
類は私物の財布から千ギル札を三枚出し、諏訪子に渡した。
「毎度ありぃ～」
「お釣りいりませんので」
「おっけぇ～」
類は、新しい懐中時計を仕舞うと、店を出て吸血館へ向かった。
ビブルの横を通り過ぎるとき、類は何とも言えない悪寒を感じた。
（・・・何だ？　今の寒気・・・）
類は、急ぎ足で館内へ戻ると、アニマのおやつの準備を始めた。
「どうしたの？　顔色悪いけど」
「いや、なんでもない」
「？」
類は、悪寒の正体を考えていた。体の不調で起こるような悪寒の類では絶対になかった。
（いや、今は忘れよう）
自分の気を紛らわせるように、類はおやつの準備を着々と進めた。
そして、事件は一週間後に起きた。

類は、休憩時間を利用してソル・クロックへ行っていた。
「古い方の懐中時計の整理ぃ、終わったよぉ」
「ありがとうございます」
「じゃ、まったねぇ」
吸血館へ向かう類の目に、昼間だというのに赤く光る空が見えた。
「ま・・・さか！？」

走りだした類の目には、最悪の光景が写った。
「館が・・・」
館が燃えていた。それも、ボヤなんてものではない。轟々と館が燃え盛っていた。
「！　八草さん！　お、お嬢様が！　お嬢様がまだ中に！」
「お嬢様が！？」
類に近づいてきた男声使用人を含め、ほとんどの使用人は館の外へ居たが、見当たらない使用人も居た。その中には、
「・・・零草？　リナリア？」
二人の姿もなかった。
「くそっ！」
「や、八草さん！　危険です！」
「知ったことか！」
類は、燃えさかる吸血館へ飛び込んだ。
「熱い・・・な。だが、関係ない！」
類は上着を脱ぎ捨てると、全速力で走りだした。
「何処だ・・・お嬢様！　零草！　リナリア！　アンドレ！　トーマ・・・待てよ？」
何かに気付いたように類は立ち止まった。類は記憶をたどった。
「なんで・・・ビブルが居ない・・・？」
類が吸血館の外の使用人を見たとき、ビブルは居なかった。それが何を意味するか、類はまだ分からなかったが、一つの疑問として類の頭に残った。
「・・・いや、今はお嬢様を！」
再び類は走りだした。

「く、苦しい・・・誰か・・・」
「リナリー・・・しっかり・・・」
リナリアと神菜子は、二階廊下で立往生していた。崩れた天井のせいで、階段側に行けなくなっていたのだ。
「どこか・・・窓からでも出れれば！」
「駄目です！　ドアノブが熱すぎて触れません！」
「そんな・・・」
遂にリナリアが倒れ、ぐったりとする。
「リナリー！」
「はあ・・・はあ・・・」
「どうしよう・・・」
その時、崩れた天井が吹き飛んだ。階段側にはアニマが立っていた。
「しっかりなさい。出るわよ・・・」
「お嬢様！」
「はあ・・・はあ・・・」
「・・・まずいわね。私も、もう限界よ・・・」
アニマが、膝から倒れこむ。滝のように汗が流れる。
「し、しっかりして下さい！」
「急いで・・・出ないと、此処も崩れるわ！　急いで！」
「でも、私も二人同時には・・・」
「なら、リナリアを先に運び出しなさい！　症状が重いわ！」
「しかし・・・」
「私のことはいいから！　私が誰か分かってるでしょ！？」
「ですが・・・」
「お嬢様！」
「！　類！？　どうしてここに・・・」
「それは後で！　零草はリナリアを頼む！」
「わ、分かった！」
類がアニマを、神菜子がリナリアを背負って出口へ向かった。

「八草さん！　メイド長！　それに・・・お嬢様とリナリアも！」
「リナリアを医者に、中毒かもしれない」
「お嬢様も、症状は軽いけど・・・」
「わ、分かりました。って、八草さん！　なにしてるんですか！」
類は、再び吸血館の方へ走りだした。
「まだ中に人が居る！　消防隊がくるまで、待ってられない！」
類は再び業火の中に消えていった。
残りの使用人は、全員で五人。全員が、地下図書館に居た。
地下図書館の扉は固く、ノブも鉄のため開けることが出来なかった。
「嫌だ！　死にたくない！」
「助けて・・・」
図書館からの微かな声に、類は気付いた。類は扉をこじ開けようとしたが、熱くて触ることすら出来なかった。
「蹴破れるほどやわじゃない・・・どうすれば・・・」
迷う類に、何者かが背後から近づいていっていた。

執事、お嬢様を追う

館の外にて、神菜子はほかの使用人を励ましていた。
「大丈夫！　残りの皆もきっと無事だから！」
神菜子自身も、内心心配でならなかった。吸血鬼とはいえ、類も危険だ。
「・・・あれ？」
燃えさかる吸血館の二階の窓に、門番の制服を着た男が見えた。ビブルだ。
「なんで、あんな所に・・・」
ビブルが炎の中にに消えると、ビブルの居た部屋は焼け落ちてしまった。
それと同時に、使用人たちの間を走り吸血館の中へ向かう影があった。
「えっ！？　あ、あれは・・・」
影は、手に持った矛で吸血館の入り口を薙ぎ払うと中へ飛び込んだ。
「そんな・・・なんで、あいつが！」
神菜子は、驚愕の表情を顔に浮かべた。
影の正体とは・・・

「開かない！　開け！　開けぇえ！！」
悪戦苦闘する類を尻目に、そいつは扉を蹴破った。
「ちっ、せっかくのお宝が燃えちまうじゃねえか。全く。リベンジに来たら、こんなことになってるなんてな！」

「お、お前は・・・」
影の正体は、ルナドだった。ルナドは、不機嫌そうな顔で図書館へと入っていった。
「小僧！　世界最古の書物ってのは何処だ！」
「な、お前そんな場合じゃないだろ！」
「うるせえな。じゃあ取引するか。俺に無償で本をよこせば、本のついでに・・・こいつらも外まで運んでやるよ！」
「ほ、本当だな！？」
「ああ、約束は守るぜ」
「・・・分かった。一番奥の棚に入ってる」
「おっしゃ！　待ってろ！」
類は、藁にもすがる思いでルナドと取引をした。ルナドが約束を破れば、全員が危ない賭けだ。
「ふん、思ったよりぼろっちいもんだな。ま、いいか。小僧！　俺が三人担いでく。お前も二人くらいイケるだろ！」
「当たり前だ！」
ルナドは約束を守った。ルナドは、適当に三人を担いで走り去る。それを追うように類も走りだす。
「ああ、そうだ小僧。さっき、怪しい奴を見かけたぜ」
「怪しい奴？」
「俺の長年の勘からして、彼奴は人間じゃねえ。きっと、この火事もそいつのせいだろう」
「！　なんだって！？　そいつの特徴は！」
「茶髪に黄色い目、それにけったいな緑色の服を着ていたっけな」
「それは吸血館の門番服だ！　ということは・・・まさか！」
「心当たりがあるのか？」
「・・・ビブルだ。こないだお前が侵入したのをきっかけに雇った門番だ」
「ほう」
そうこうしている間に、二人は館の外へ出た。

「ふう、おい小僧。俺は今から極上のお宝を奪いに行くんだが、付いて来るか？」
「泥棒稼業に手を貸す道理はない」
「そうかい、まあお前も来ることになるさ。きっとな・・・」
そう言って、ルナドは走り去った。それとほぼ同時に、神菜子が走り寄ってきた。
「る、類！　どうしよう。お嬢様が・・・お嬢様がビブルに攫われた！」
「え・・・！？　ど、どうして！」
「ルナドに気を取られてる間に、館から飛び降りてきたビブルが・・・」
「・・・やっぱりあいつが！」
「え？」
類は立ち上がると、服装を整えてナイフを構えた。
「零草、皆を頼む」
「ど、何処に行くの？」
「お嬢様を取り返しに行ってくる」
類は、怒りを顕わにしてルナドを追いかけた。

「よお、小僧。早かったな」
「知ってたのか・・・お嬢様が攫われたこと」
「いや、知らなかったぜ。だが、お前が来る理由はほかにもあるしな」
「なんだ？」
「お前の高そうな懐中時計、拝借したぜ」
「なっ！？　あ、ない！」

「はい、返すよ。・・・さて、着いたぜ」
「え、早・・・」
ルナドに連れられて類が着いたのは、吸血感より少し小さい館だった。その名も、
「【大罪館】か・・・こじゃれてんな」
門の前には、ひとりの女が立っていた。
「よお、通してもらおうか。中の奴に用があるんだ」
女は綺麗な緑髪緑眼で、左目が髪で隠れていた。
「お通しするわけにはいきません。命令ですので」
「なら、力づくでも入らせてもらうぜ」
「・・・では、手加減しませんよ」
「必要ねえ」
ルナドが答えた瞬間に、女が回し蹴りでルナドを吹き飛ばした。
「!?　強い・・・!」
「我司るは大罪、名はエンヴィ。緑眼鬼レヴィ・ジェラシア!　参ります!」
レヴィは、拳を握りしめて構えた。
「どうする小僧。どっちかが残って、どっちかだけでも侵入するか？」
「いえ、きっと通用しない。ここは、二人同時に攻めてでも倒しましょう」
「だな、俺もそう思っていたところだ」
「・・・死ぬ以上の苦しみを味わう覚悟は、できてますか？」
「お前を倒す気合はあるぜ」
「お嬢様を死んでも連れ戻す覚悟なら!」
戦闘が開始された。先手を打ったのは、類のナイフだ。しかし、容易くレヴィに蹴り飛ばされた。
「なら次は俺だ!」
ルナドは矛を作り出すと、飛び上がってレヴィに迫った。
「ナイフほど軽くねえぞ!　この矛は!」

「・・・遅いですね」
矛を避けたレヴィはルナドに旋風脚を喰らわせる。
「痛っ・・・！」
「此処は通しません。例え軍隊一つ連れてきても、あたいは此処をどきません」
「強情な女だな・・・」
「ルナド、それは悪役のセリフだ」
「いいんだよ。所詮俺は悪党さ。悪党は悪党らしく、卑怯な手で突破するぜ」
ルナドは、今まで類の前では見せなかった翼を広げた。類やアニマと違って、それはまるで童話に出てくるドラゴンのような翼だった。
「！　ドラキュラ！？」
「ドラキュラは俺のご先祖さ。さて、本気でいかせてもらうぜ！」
ルナドは、血をばらまいてレヴィに向き合った。
「【ツェペシュ・フォレスト】串材の森へようこそ」
「・・・！」
レヴィの足元から、真っ赤な矛がいくつも突き出した。レヴィの姿が隠れて見えないほどだ。
「どうだ！」
「すごい・・・これが本気のルナド・・・！」
しかし、レヴィは倒れていなかった。
「・・・妬ましい」
「あ？」
「妬ましい。この世の全てが妬ましい。貴方のその力も・・・妬ましい。【ジェラシー・アイ】・・・」
レヴィの左目が不気味に光る。その瞬間、ルナドの胸から緑色の光が飛び出してレヴィの左目に入っていった。
「な、なにしやがった！」
「・・・【ツェペシュ・フォレスト】」

レヴィが腕をかざすと、類達の足元から大量の矛がつきだした。
「ぐぁぁあああああ！！！」
「あっ・・・がはっ！」
レヴィは、二人を見下ろす。
「まだですよ。命令通りに、貴方がたを迎え撃ちます」
類は、ビブルのときと同じ悪寒を感じた。

執事、辛勝する

「おい、小僧！　ぼーっとしてんな！　死ぬぞ！」
「五月蝿い！　言われなくても分かってる！」
ルナドの技を使い、レヴィは二人を追い詰めていた。
「逃がしませんよ」
「くそっ！　なんであいつ、俺の能力を！」
「ルナド！　自分で能力は使えるか？」
「いや、駄目だ。どうやら、真似されたんじゃなくて奪われたみたいだな。俺の能力は」
ルナドは、苦虫を噛み潰したような顔をする。
「ふざけやがって・・・怪盗から物盗るなんざよ。小僧、お前の能力であいつの時間を止められねえか？　一瞬でも出来れば、一発叩きこむ」
「無理だ。僕の【スウィートタイム】は、僕以外の全てに作用する。標的を一つに定めることはできない！」
「・・・めんどくせえな。俺が少しの間足止めする。お前は一気に侵入しろ」
「！？　無理だ！　二人でも苦戦してるのに、能力を奪われたお前がどうやって！」
「うるせぇな！　いいからお前は強行突破しろ。いいな！？」
類は、ルナドに押し切られるように渋々承諾した。
「・・・分かった」
「よし、行くぞ」
ルナドが構えると同時に、深紅の槍がルナド目掛けて飛んできた。
「ルナド！」
「・・・甘い」
ルナドは、一歩も動くこと無く槍を受け止めると、膝でへし折った。

「俺の能力で、俺に勝とうなんざ思うなよ。俺の能力は、俺が使ってこその【ツェペシュ・ザ・ドラクル】だ！」
「そうですか。ですが、なんであろうとこの門は通しません！」
レヴィは、手の甲を引っ掻き血を出した。
「【スパインナックル】」
「・・・そりゃ痛そうだ」
ルナドは苦笑すると、レヴィに向かっていった。
「小僧！　行け！」
「・・・はい！」
しかし、類が走りだすとレヴィは標的を類に変えた。
「なっ！？」
「門を通ることは、許しません！」
「しまった！」
類は、血の棘だらけの拳を腹に受けた。
「ぐぁあ・・・！！」
「小僧！」
レヴィは、類を蹴り飛ばしてルナドに向き合った。
「次は、貴方です」
「・・・まじかよ」
その時、レヴィの背中にナイフが三本突き刺さった。
「ッ・・・！？」
「はあ・・・まさか、直したばっかりの古い懐中時計が身代わりになってくれるとは」
「身代わり・・・？」
類が海中に手を突っ込み取り出した時計は粉々になっていた。
「さて、やはり僕も戦わせてもらいます。この懐中時計、気に入っていたんでね」
類はナイフをありったけ取り出すと、空に放り投げた。
「【リッパー・ザ・リーパー】　愚者に裁きの刃を」
「な、ナイフが・・・！」

空中に飛んだナイフが、緩やかに向きを変えながらレヴィの方へ向かっていった。
「切り裂け」
「ひ・・・きゃぁあああああ！！！」
「ルナド！」
「おっしゃ！」
ナイフにひるんだレヴィを、後ろからルナドが羽交い締めにした。
「う・・・離せ・・・」
レヴィは馬鹿力でルナドから離れようとしたが、吸血鬼の力には勝てなかった。
「はあ・・・あたいが・・・やられるなんて・・・」
「さて、俺の能力を返してもらおうか」
「そうです。返しさえすれば、殺しはしません」
「・・・能力を返せば、貴方達は門を通るでしょう」
「もちろん。助けないといけない人がいるから」
「・・・」
レヴィは、最初は黙ったままだったが、遂に声を出した。
「分かりました。お返しします・・・」
そう言うと、レヴィの胸から緑色の光が飛び出し、ルナドの下へ戻っていった。
「お、この感じは・・・よし、能力は発動する」
「さて、行きますか」
「おお、そうだな」
レヴィを壁にもたれかけさせて、類が門を通ろうとすると、類の足をレヴィが掴んだ。
「な、なにを」
「まだやる気か？」
「待って下さい。戦う気はありません。た、頼みが・・・あるんです」
「・・・はい？」

「あ、貴方がたの探している人は、確かにこの中にいますし、その人を攫った人もここにいます。それでこの計画を考えた、あたい達のリーダーを助けてください」
「は？」
二人には、レヴィの言っている意味がわからなかった。
「あたいたちのリーダーは、最近何かに取り憑かれたように変わってしまって・・・正直この計画も意図がわからず、ただ命令だけを実行しているだけなんです」
「・・・言い訳か？」
「違いますっ！　信じて下さい！　あたいたちのリーダーの目を覚まさせて欲しいんです・・・」
そんなとき類は、冷静に考えていた。
（門番であるレヴィが能力者なら、そのリーダーもまた能力者の可能性が高い。ここは頼みを引き受ける代わりに情報を・・・）
「レヴィさん、その頼み引き受けます」
「はぁ！？」
「あ、ありがとうございます！」
「その代わり、僕の質問に答えて下さい」
「はい。何でも答えます」
「この館の中には、何人いますか？」
「六人です」
「この大きな館に六人だけ・・・か。では、そのうち何人が能力者ですか？」
「全員です」
類は、倒れそうになった。門番でこれほど苦戦しているのに、中にも未だ能力者がいると知ったせいだ。
「じゃ、じゃあこれで質問は終わります」
「・・・行くか？」
「ああ」
「お願いします・・・」

二人は、門を通り館の中へと向かっていった。

「はあ・・・はあ・・・」
「貴女は・・・？」
レヴィの目の前に、髪を乱して立つメイドが一人。
「ど、どうしたんですか？　その怪我・・・」
「気にしないで下さい。ところで、貴女は何のようで・・・？」
「人を探しているんですけど・・・私と同じくらいの執事見ませんでした？」
「それなら、入って行きましたよ」
「そうですか！　は、入っても・・・」
「いいですよ。あたいは、寝てて何も見てませんから」
レヴィは返事をすると、目を閉じた。
そして、メイドは館の中へ向かった。
「類・・・私も、お嬢様を助けたいから・・・」
神菜子は、ポケットの中の奇妙な模様が描かれた球を握りしめた。
「これを使えば・・・お嬢様を助けられるから！」

執事、悪酔いする

「類っ！」
「零草！？　なんで・・・！」
「やっぱり、私もお嬢様を助けたいから・・・」
「でも、ほかの使用人は？」
「大丈夫！　料理長が、使用人たちのことは任せろ、って」
「料理長・・・あとで礼を言っておかないと」
「それより、お嬢様は？　さっきからずっと心配で」
「なんだ小娘。あの女が、簡単にくたばるとでも？」
「でも、今日は晴れだし・・・」
類とルナドが、一瞬動きを止める。
「まさか・・・」
「嘘だろ？」
「本当に！　雲一つ無いよ！」
「それはまずい・・・もし、誘拐犯のビブルが傘でも使ってなかったら、お嬢様は今頃」
「霧だな。間違いなく」
「だから心配なんだって！」
「・・・あれ？　そういえばルナドはなんで直射日光にあたっても霧にならない？」
「ん？　俺は普通のヴァンパイアと違って、ドラキュラ一族だからな。性質が違うんだ」
「そうか・・・」
三人が館の中を進んでいくと、巨大なシャンデリアのある広間に出た。
「六人しか居ないにしては、でけぇ広間だな」
「・・・気をつけろ。何か居る」
「ん？　上・・・だな」

「えっ？　ど、何処？」
その時、シャンデリアの上から雨のようにレイピアが降り注いだ。
「うおっ！？」
「くっ・・・【タイムリープ】！　戻れ！」
「あ、危な・・・」
レイピアは、類の技によって天井へ戻っていくと、急に消滅した。
「消えた！？」
「あーあ、せっかく一網打尽に出来るかと思ってたのに。侵入者、俺と一発・・・殺り合おうぜ」
シャンデリアの上に、その男は佇んでいた。それを見るだけで、その男が人間ではないのが分かる。
「此処に居るってことは、レヴィを倒してきたってことだよな。人間程度に勝てるやつじゃないはずだけどな」
「お前が、次の相手か」
「まあね、だけど・・・俺が欲するのは殲滅でも駆逐でも喧嘩でもない。決闘だ」
そう言うと、男は飛び降りて着地をする。
「我司るは大罪、名はグリード。マモーネ・グリードリ、戦闘を開始する」
「決闘・・・？　訳のわからないことを」
「我望む、誰の邪魔もされない決闘場を」
マモーネが呟くと、マモーネと類が突如現れた巨大な壁で、ルナドと神菜子と分断された。
「なんだ・・・これ！」
「俺を倒すか、お前が倒れるかしないと壁は消えず、この先にもいけない。もちろん、後ろの二人はお前の手助けをすることもできない」
「なんだと！？」
「さて、殺し合おうぜ」
マモーネが手を開くと、手の上からレイピアが現れ、マモーネが

それをつかむ。
「俺の能力は、望んだものを創りだす能力【ディザイア・メイカー】だ。制約は強いが、その分能力も協力！」
マモーネのレイピアが、類の頬を掠る。
「くっ・・・【スウィートタイム】！　・・・あれ？」
時は止まらず、マモーネのレイピアは類目掛けて突き続けている。
「どうしたっ！？　レヴィを倒した実力、見せてもらおうか！」
（しまった・・・血が足りない！　しかし、能力を使わずに勝てるような相手じゃない！！）
「ははははっ！　その程度か！　なら、死ね！」
類の左胸目掛けて、レイピアが突かれる。レイピアは類の上着を突き刺したが、類はナイフを構えてマモーネの懐へ飛び込んでいた。
「いつの間に・・・！」
「はぁあああああ！！！」
「なんてね。我望む、鋼鉄の盾を」
「・・・なっ・・・に！？」
マモーネの脇腹に当たったナイフは、刺さること無く折れてしまった。
「望めば、皮膚を鋼鉄にすることも出来る。さて、これで終わり？」
「しまっ・・・！」
類の腹に膝蹴りが直撃する。類の表情が歪む。
「ぐはっ！」
「さて、そろそろ死ねよ。終わりだ」
「ま、まだ・・・」
類はマモーネと距離を取ると、穴の開いた上着から一本のボトルを取り出す。
「緊急用にってお嬢様に渡されたけど、今が使いどきか」
類は、ボトルの中の液体を飲み干す。それは、血ではなかった。
「なんだ・・・これ・・・まさか！」
「死ぬ準備はできたのか？」

「お、お嬢様・・・これは、ワイン・・・」
類は、敵を目前に倒れた。
「？　なんだか知らないが、終わりにしよう」
「ふ・・・ふふふ、あはははははは！！」
「！？　な、なんだ？」
狂ったように、類は立ち上がるとナイフを構えて飛び上がった。
「あはっ！　あはははははは！」
「何をする気だ・・・そっちには何も・・・！？　まさか！？」
「はははははははは・・・さあて、ＴＨＥ　ＥＮＤ」
酔っ払った類は、シャンデリアを落としてしまった。その上、シャンデリアと共に類はマモーネに突進していった。
「わ、我望む！　我守る強靭な盾を！」
「遅い！」
壁から盾が突き出てくると同時に、類は速度を上げマモーネの目の前まで迫った。
「終わりなのは、お前だ」
「う、ぐぁあああああああ！！！」
類のナイフはマモーネの両手両足に刺さり、マモーネの胸には類の拳が当たっていた。
「まさか・・・こんな、簡単に負けるとは・・・さすがレヴィを倒しただけはある、な」
マモーネは、言い切ると動かなくなった。それと同時に、壁が消え去りルナドと神菜子が類に走り寄る。
「良くやったな！　小僧！」
「大丈夫？　怪我は・・・」
「・・・頭痛い」
目の覚めた類は、頭を抑えながら立ち上がった。
「い、行こう」
「よし！」
「分かった！」

三人は、更に奥へと進んでいった。

「さて、これでよし」
医務室で、男は薬の整理をしている。
「やはりベルゼに薬を渡しておいて良かった。対日光剤も調合は完璧だったし、収穫が多いな」
男は、ブツブツと独り言を言いながら怪しい薬を並べ変えていた。
「ん？　マンドラゴラが一本足りないな。仕方ない。サタニットちゃんのところに貰いに行くか」
男が医務室を出ていくと、医務室のベッドからアニマが現れた。
「あの男・・・何のつもりかしら？　まあ良いわ。抜けださせてもらうわよっと」
アニマは医務室の鏡の前まで行くと、呟いた。
「【ミラー・シャドウ】」
アニマの姿は、次の瞬間には消えていた。

メイド長、孤立する

「そろそろ、次のやつにあってもおかしくない頃だな」
「そういう事言わないでよ！　本当に出てきそうなんだから・・・」
「そういえば、お前何もしてないよな」
「あ、あの時は・・・」
「仕方ないよ。僕が勝てたのだって殆どまぐれだ（酒の力だし）。無駄に零草が危険な目に合わなくていい」
「ちっ、甘いな」
「おっと、犯罪者には厳しいですよ？」
「言ってろ」
廊下を歩いている三人の背後を、一匹の蝿がついて飛んでいた。
「・・・」
蝿は、遠ざからず近づかず、三人を見ていた。
「ん？　もしかして、二手に分かれてる？」
「あ、本当だ」
三人の目の前には、二階へあがる階段と奥まで続く道があった。
「どうする？」
「二手に分かれて進むか・・・そうなると、組み合わせが重要だな」
「俺はどうでもいいぜ」
「私は、ルナドと一緒はヤダ」
「ッ・・・小娘」
「ふんっ」
「僕は、ルナドを一人にするのは信用できないから反対」
「あ、小僧！　って、それって一択じゃねえか？」
「あ」
つまり、ルナドは類と組むことが決まり、神菜子が一人で進むことになったのだ。
「うー、一人か・・・」

「お前が折れれば、俺が一緒に行ってやっても良いんだぜ？」
「それは絶対ヤダ」
「てめえ・・・」
「それじゃ、僕とルナドは二階に。零草は一階の奥へってことで」
「了解」
「あいよ」
こうして、三人は二手にわかれた。

二階廊下を歩きながら、二人は話していた。
「で、本当に小娘を一人にしてよかったのか？」
「ええ、零草なら大丈夫ですよ。貴方を一人にするよりは信用できます」
「そうじゃなくて、安全性でだ」
「大丈夫です。零草から、かすかにお嬢様の気配がしますから」
「？　どういう意味だ」
「教える必要はありません。と、どうやら遭遇してしまったようですよ。敵」
「あん？」
廊下の少し先に、髪の長い女が立っていた。
「また女か。とっとと終わらせるぞ」
「！　待て、ルナド！　伏せろっ！」
「え・・・？」
女は、二人に向けて拳銃を乱射した。
「うひゃぁ、こりゃすげえ」
「感心してる場合か！」
二人は、とっさに近くの部屋に飛び込んだ。

「やっぱり、此処の住民は人間じゃねえな。あんな拳銃を片手で乱射できる女を俺は人間とは認めねえぞ」
「ああ、大男でも片手じゃ扱えないだろうな」
「どうする？　銃はさすがに強行突破って訳にはいかないぜ。近づくことすら出来ねえ」
「時を巻き戻して、弾を銃に打ち返すことができるが・・・」
「・・・出来るのか？　銃が暴発すれば、勝ったようなもんだぞ」
「でも、もう血が足りない。一瞬時を止めるくらいしかできない」
「一瞬か・・・」
銃撃は、一刻も止まなかった。弾切れと同時に、別の銃と交換しているのだ。
「小僧、俺が壁を作る。そこから、俺が渡す盾を使って接近しろ」
「盾？」
「俺の能力で作る。耐久力は、鋼以上だ」
「分かった」
類は、ルナドから盾を受け取った。
「行くぞ」
「ああ」
ルナドが壁を作ると、類は部屋を飛び出して、壁の隙間から女に接近した。
「！？」
類は、ナイフを女に投げつけて銃を避けるように飛び上がった。
ナイフは女の銃をはじき飛ばしたが、本人に傷をつけることは出来なかった。
「これで・・・！」
類は、普段の投擲用とは別の接近専用ナイフを取り出した。
「・・・近寄るな、男如きが」
「ぐあっ・・・！？」
類は、突然腕を抑えて蹲った。
「小僧！？」

「な、何が・・・」
「汚らわしい。今すぐ・・・消えろ」
女が、新しい銃を取り出す。銃口が類を向く。
「くっ・・・」
「死ね」
「小僧！」
ルナドがとっさに壁を砕き、破片を女に向けて投げた。破片は女の右肩に当たり、同時に銃声が鳴る。
「！　・・・生きてる？」
「くっ、しまった」
「よし、生きてるな小僧」
「ああ、なんとか」
「ッ・・・調子にのるな！」
「おっと」
女の蹴りを、類は避けた。女は、銃を取り出さなかった。
「・・・もう無いか。仕方ない。ここは、一番苦しい殺し方をしてあげる」
女は、類の方に手の平を向けて呟いた。
「我司るは大罪、名はラース。【ペインアンロック・ハート】」
「ッ・・・！？」
類が、頭を抑えてもがき始めた。
「私の能力は傷を開く能力【デッド・オア・デッド】。心の傷を開かれた気分はどう？」
「あぁ・・・あぁあああああああ！！！」
類は、忘れ去りたかった心の傷（トラウマ）を見ていた。
それは、十年前のことだった。

「おい！　小僧！　しっかりしろ！　おい！！」
「無駄よ。この技を受けて、正気に戻った奴は居ない。狂気に溺れて、自ら命を絶つ」
「てめえ・・・よし、分かった。是が非でもお前をねじ伏せて、小僧を正気に戻せばいいんだな」
「出来るかしら？　下賤な男が、私に勝てるとでも？」
「男嫌いか？　いっとくが、俺は女だからって手加減するほど甘くねえぞ。修羅場潜ってきてるからな」
「ふんっ、貴方もこの子と同じ目に合わせてあげるわ」
「やってみろ。俺のトラウマが、見つかればいいがな」
ルナドは、矛を作ると不敵に笑った。
「お前が理解できるほど、俺の傷は浅くないんでね。串刺公の名にかけて、お前をねじ伏せてやる」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3506y/

無音の執事〜タイムキーパー〜

2011年11月22日01時55分発行